

## 私が現場で体験したこと・思ったこと

鈴木 康 久 (株シムコ)

All about SWINE 44, 41-42

### 0. 前置き

私がこの仕事を始めたのは、国家試験浪人をしている時で、まだ獣医師ではなかった。

そのため、一農場職員として、通常の管理業務を行っていた。(現在も管理業務を行っていた。)つまり、新米どころか、タマゴなのであった。

そんな私の体験談ごときで、この様な場を汚してしまうことは大変申し訳ない気持ちになるが、せっかく機会を頂いたので、最後までこの駄文にお付き合い頂きたい。

### 1. 実習よりも濃密な経験

通常業務の中で、最初の壁は、採血だった。「何事も経験だから」と、採血の練習をさせてもらった時のことだ。通常は、20頭の採血など、移動を含めても1時間もあれば出来るだろう。そして、その時に使用する採血用の針や真空管は、予備として、取る量+1本もあれば、予備を使用することなく終われるはずだ。今回は「練習」なので、予備を5本準備して、万全の体制で望んだ。しかし、取り直しに取り直しを重ね、気がつけば2時間近く採血をし、予備を全て使い切るどころか、さらに倍の予備を消費する事に……。実習では尾動脈からの採血か、耳翼からの採血しか知らなかったのも、頸静脈の在り処がよくわからな

かったのが原因だった。それにしても、針を刺した採血管には血が入らないのに、針を抜いた注射痕からは出血するなんて、不思議なことも……。センスの無さを痛感した出来事だった。

その時にもらった忘れられない一言が、「お前、本当に獣医か？」である。

面目次第もございません。ちなみに現在は、どのサイズの豚でも、採血が可能なくらいには上達している。やはり、「センス」よりも「慣れ」の問題なのだと思う。

### 2. 期待されている能力

獣医師になってから殊更が増えたのが、薬品関係の質問である。これも、学校で学んだことと現場での差にかなり戸惑うこととなった。

学校では基本的に「薬品名」とは、「物質名」を指す。しかし、現場では、「薬品名」とは「商品名」になるのだ。抗生物質などは、そのまま同じことが多いが、ホルモン剤・消毒薬などの多くは、説明書きを見なければ何の薬品か分からない事が度々あった。

さらに困ったのが「出荷禁止期間」である。産業動物である以上、投与した薬品が体内に残留してはいけないのだが、基本的に薬品の注意書きを見なければ分からないことが多い。それを、「獣医師ならば当然知っているでしょ？」という感じ

で聞かれてしまうと、戸惑ってしまうのだ。

現在は、農場で使用している薬品の説明書きを集め、覚えるようにしている。また、農場でのワクチンプログラム及び消毒スケジュールなど、聞かれることが多いことには、すぐに対応できるように覚えるようにしている。

### 3. 豚を観察する目

獣医師として必要なのは、「病気の豚を見つける目」だと思う。しかし、農場職員としては、そこに、「通常業務として」が加わる。最初のうちは、1頭1頭しっかりと豚を観察してしまい、「時間をかけすぎ」と注意されてしまった。そこで気づいたのは、通常業務で病畜を見つけるには、違和感を大事にする事だった。「異常」を探すよりも、「普通ではないこと」に気づく方が、圧倒的に早いのだ。

そして、種豚会社である以上、求められるのが「良い豚を見極める目」である。これは、度々豚を観察しているが、まだまだ自信を持てるレベル

にはなっていない。

### 4. 発生している病気について

基本的に学校で重点的に押さえている病気については、SPF農場では発生が無いと言ってしまいうくらいに発生していない。逆に清潔な農場であるが故に、温湿度変化や移動・群編成などのストレスによる下痢や咳が目立ってしまうことがある。消毒・投薬・ワクチンで押さえているおかげであると言える。

### 5. 最後に

このように日々、農場内で右往左往している中で、それなりに進歩はしていると思う。周囲の温かい支えによって、様々な体験をさせてもらえる環境に、多大なる感謝を送りたい。また、このような機会を与えてくださった関係者各位および、このような粗末な文章に最後までお付き合い頂いたすべての皆様に、多大なる感謝を。ありがとうございました。